

日中接触場面の中国語会話における「聞き返し」 —効果的な聞き返し方略を探って—

Which Clarification Requests in Chinese Contact Situations are Most Effective?

楊 虹
YANG Hong

Keyword: 意味交渉のプロセス 言語形式 発話連鎖 調整行動

1. はじめに

日常会話において、相手の発話が聞き取れない、意味がわからない場合などに遭遇すると、聞き返しなどで問題を明確にして解決を図ることはよくある。第二言語習得研究の分野では、非母語話者が参加する会話において、発話の理解になんらかの問題が発生した、または問題が予想される際に会話の参加者が発話の調整や再構築を行うことを意味交渉と定義づけており (Pica 1994)、聞き返しも、相手の発話の理解の問題を取り除く意味交渉の一つである。また、聞き返しは、理解の問題を取り除くだけでなく、学習者の理解可能なインプットを増やし、習得を促進するとも指摘されている (Long 1983, 宮崎 2002, 方 2013 他)。しかし一方で、聞き返しによって会話の進行が一時的に止まってしまうため、聞き返しが頻繁に行われると、会話が滞りがちになってしまい、円滑なコミュニケーションが損なわれる可能性も予想される。そのため、学習者にとって、効果的な聞き返しの習得は、会話の内容を正確に理解し、かつ会話が円滑に進行していくために必要不可欠である。

しかし、日本人の中国語習得研究に目を転じると、中国語学習者の聞き返しに関する研究は、管見の限りまだない。文部科学省の集計資料によれば、日本人の海外留学先及び留学生数では、2012年時点で、中国はアメリカを抜いて1位となっており¹、日本国内でも、高等学校において、英語以外の外国語科目で、開設校と履修者数が最も多いのは中国語である²。今後ビジネスなどさまざまな分野において、中国語による日中接触場面が増えていくことが予想され、日中接触場面の会話における聞き返しを含む意味交渉の解明は、日本人中国語学習者への会話教育に有益な示唆を与えるだろう。

そこで、本研究は、中国語による日中接触場面の2者間会話において、発話の理解に関わる問題を取り除くために母語話者と非母語話者それぞれがどのような聞き返しをしているのか、

1 留学生数は、前年度の17.6%増の21,126人である。http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm

2 平成26年5月1日現在、517校、履修者数19106人である。

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/04/09/1323948_03_2.pdf

また相手の聞き返しを受けて、どのような調整行動をとっているかを分析することにより、中国語による日中接触場面の意味交渉の特徴の一端を明らかにし、日本人学習者に対する中国語の会話教育に寄与することを目指す。

2. 先行研究

母語話者と非母語話者が参加する接触場面の会話を対象として、聞き返しを中心とした意味交渉についての研究は、日本語学習者を対象とした研究(尾崎 1992, 1993, 2001, Miyazaki 2000, モンルタイ 2006, 林 2007, 福富 2012, 許 2013 等)や日本人が非母語話者として参加する英語会話を対象とした研究(津田 2015, 山本 2014)が見られるが、日本人中国語学習者を対象とした研究は管見の限りない。そのため、本章では、日本語学習者に焦点を当てた日本語会話における聞き返し、及び日本人英語学習者の聞き返しを含む意味交渉の研究を概観する。

2.1 日本語学習者の聞き返し

日本語学習者を対象とした研究は、聞き返しのストラテジーや聞き返しの回避、聞き返しと相手の調整を含めた問題解決のプロセスなどさまざまな観点から行われてきた。「聞き返し」を会話のストラテジーの一つとして捉える場合、「聞き返し」の成功率が焦点となり、どのような言語形式または機能の聞き返しの成功率が高いか(または低いか)が注目される。聞き返しの機能は、主に会話参加者へのフォローアップインタビューに基づく発話意図から分類される。そして、聞き返しの意図が伝わらず、問題が解決されない場合、さらなる聞き返し、すなわち聞き返しの連鎖が生起すると捉えられる(Miyazaki 2000, モンルタイ 2006, 林 2007, 許 2013)。これまでの研究では、聞き返しの形式や機能の分類は研究者によって異なり、分類や分析方法の違いにより、結果も異なるものの、いくつかの共通した指摘が見られる。言語形式に関しては、相手の発話を繰り返す形式、及び相手の発話を自分の理解で言い換える形式の成功率が高く、間投詞や、「わかりません」などの「非確認型」あるいは「不特定型」の成功率が低いと指摘されている。また、機能に関しては、相手の確認を求めるものの成功率が高いということが明らかになっている。ただし、この点に関しては、形式面で指摘されている言い換える形式の成功率の高さと重なる指摘とも言える。

また、問題解決の成功・不成功には、聞き返しの受け手の調整行動も関わっている。聞き返しの受け手がどのように応答しているかについて分析した尾崎(1993)は、日本語母語話者は主に「反復」「確認」「説明」の3つのタイプの発話で応じており、学習者の日本語力と聞き返しの形式や発話意図から聞き返しの対象となる語彙が未知か既知かを判断して応答しているのだと指摘している。

上記の研究の多くは、日本語学習者の聞き返しにしか焦点を当てていない。しかし、実際の接触場面の会話においては、母語話者も聞き返しをする。Miyazaki(2000)は、日本語母語話者と学習者の両方を分析し、母語話者は状況に応じてさまざまな聞き返し方略を用いていると指

摘している。Miyazaki (2000) によれば、日本語学習者が「説明要求」や、「反復／説明要求」が多いのに対し、日本語母語話者は「理解確認」が最も多く見られる。つまり、母語話者と非母語話者とは、理解の問題に違いが見られるため、解決するために取られる聞き返し方略も異なる。

以上の日本語学習者が参加する接触場面の日本語会話における聞き返しの研究は、いずれもフォローアップインタビューも併せて用いて、聞き返しの発話意図を分析している。フォローアップインタビューは、尾崎 (1992) が指摘したように、「実際の聞き返しがいかなる意図のもとに発話されたかがはっきりしないケースも多い」(p.253) ため、補償的な方法だと考えられる。しかし、発話者の内省に頼るフォローアップインタビューでは、研究者の質問の仕方や、記憶の曖昧さなどが影響を与えかねない。また、そもそも会話の当事者で聞き返しを行った本人ですら問題はどこにあるのかわからない場合がある (Enfield et al.2013)。そこで本研究では、聞き返しの発話意図を特定するのは難しいと考え、フォローアップインタビューを併用した発話機能の認定という分析手法を用いず、形式のみの分析を行う。

2.2 日本人英語学習者による聞き返し

日本人英語学習者を対象とした研究では、日本語学習者を対象とした研究とは異なるアプローチがとられている。津田 (2015) は、会話のスタイルという観点から日英の母語場面、日本語または英語使用の日英接触場面の会話における他者修復を比較した。修復は、会話分析 (エスノメソドロジー) で用いられる概念で、会話の産出、聞き取り、理解に関わる問題に対処するものである (Schegloff, Jefferson & Sacks 1977)。そのうち、聞き手が話者に質問や確認を行う「他者開始の修復 (other-initiated repair)」に相当するものを津田 (2015) は「他者修復」として取り上げた。これは本研究の聞き返しに近いと考える³。津田 (2015) は、日本人と英語母語話者が参加する日本語または英語による接触場面の会話とそれぞれの母語場面の会話に見られた「他者修復の形式」を Hayashi & Hayano (2013)⁴ に基づき 5 種類に分類し、比較した。その結果、接触場面では、母語話者よりも非母語話者の聞き返しが多いことがわかった。また、英語母語話者と比べ、日本語母語話者は、「繰り返し」と「繰り返し+Q」を多用していることも明らかになった。さらに、日英接触場面では、open-class (前述の間投詞など「不特定型」に相当する。3.3 を参照。) と「繰り返し」が多くみられるが、「繰り返し+Q」が全く見られないなど、学習言語による会話であるがゆえに、他者修復の形式が簡素化されていることも明らかとなった。津田 (2015) は、日英の会話スタイルの相違を明らかにすることを目的とした研究で、本研究の目的と異なるが、日本人の学習言語使用場面での聞き返し行動に関する数少ない貴重な研究と言えよう。

また、山本 (2014) は、聞き返しそのものを扱った研究ではないが、日本人学習者と英語母

3 Schegloff, Jefferson & Sacks (1977)、Drew (1997) などの修復には、相手の発話の理解に問題がないが、訂正を求める場合なども他者開始の修復としている。本研究では、理解の問題に対処する場合のみに限定する。

4 3.3 を参照。

話者の日英接触場面の聞き返しを含む意味交渉のプロセスを分析している。これまで接触場面の意味交渉が引き起こされる要因を非母語話者にのみ帰するものがほとんどであるなか、山本(2014)は、誤解や不信が起こるその要因を非母語話者の言語運用能力の不足のほか、母語話者の話題に関する背景知識の不足に起因する場合もあると指摘している。

以上のように、日本語や英語による接触場面の会話における聞き返しの研究を概観すると、聞き返し発話の形式や機能はどのようなものか、聞き返しの受け手がどのような応答をしているか、理解の問題が即座に解決されるかどうか、母語話者と学習者の用いる聞き返し発話に違いがあるか、といった観点で分析が行われてきた。また、聞き返しの回避や聞き返しを引き起こす要因等も分析の対象とされており、研究の蓄積が厚い。しかし一方で、日本人中国語学習者の聞き返しについては、管見の限り研究がない。そこで、本研究は、日本語や英語の接触場面の会話の分析で得られた知見を参考にし、中国語による接触場面の2者間会話において、聞き返しが生じた場面に焦点を当て、母語話者と非母語話者がどのような意味交渉を行っているかについて分析し、日本人中国語学習者に対する会話教育に役立てることを目指す。

3. 研究方法

3.1 データ

本研究のデータは、中国語上級クラスを受講している日本人学習者と中国人大学生の2者間の初対面会話の録音である。データの収集は2013年中国の大学で行われた。中国語上級クラスに日本語専攻の中国人大学生がビジターとして参加し、授業活動の一環として約20分の自由会話を行った。本研究では、女性同士の会話6組を分析対象とした。中国人学生は日本語専攻4年生である。日本語の運用能力があるが、中国語の授業活動であるためなるべく中国語を使用するようにと事前に指示を与えた。

3.2 課題

本研究は、聞き返しが生じた場面の意味交渉の様相を明らかにするという目的のもと、以下の3つの課題を設け分析をする。

課題1. 聞き返しが生じた意味交渉の場面はどのくらいあるか。聞き返しは、中国語母語話者によるものが多いか、それとも日本人学習者によるものが多いか。

課題2. 中国語母語話者と日本人学習者はそれぞれどのような言語形式の聞き返しを用いて理解の問題を提示しているか。用いられる言語形式を種類別にみたとき、使用頻度に違いがあるか。

課題3. 聞き返しが生じた場合の意味交渉のプロセスはどのようなものか。中国語母語話者の聞き返しから始まった意味交渉と日本人学習者の聞き返しから始まった意味交渉のプロセスに違いが見られるか。もし意味交渉のプロセスに違いが見られた場合、意味交渉のプロセスに影響を与える要因は何か。

題であるかという手がかりは最も少ない⁶ものとなる。そして、右端の理解度の最も強い表現は、問題がどこにあるのかを示すだけでなく、発話への高い理解度を示し、解決策まで提示している⁷ (Hayashi & Hayano 2013, p. 296)。具体的には、修復の対象となる発話の言い換えや、省略されている語彙や文の一部を提示して確認を求めるものがある。この2つの間に位置し、段階的に理解度が高くなっていく表現は、疑問詞のみを提示する表現 (Q-word)、疑問詞だけでなく、発話の一部をも繰り返すことにより問題の箇所を特定する表現 (Repeat+Q-word)、問題となる箇所を繰り返して示す表現 (Repeat) となる。

本研究では、上記のHayashi & Hayano (2013) の5つの形式に対応して、1. 感動詞類, 2. 疑問詞疑問文, 3. 繰り返すと疑問表現, 4. 繰り返し, 5. 確認の疑問文という5つに分類する。

課題3については、問題が修復されるまで、または修復が失敗に終わったことが判明するまでのやり取りを意味交渉のプロセスとし、プロセスの特徴からパターンの分類を行う。修復がスムーズに行われたものとそうでないものにどのような違いがみられるかについて、①聞き返しの言語形式に違いが見られるか、②聞き返しを受けた相手の後続発話に違いが見られるか、という2点から発話の質的及び量的分析を行う。

4. 結果と考察

4.1 聞き返しから始まる意味交渉の生起頻度

分析の結果、聞き返しが生じた意味交渉は、合計74で、そのうち、日本人学習者の発話が理解できずに中国語母語話者が聞き返したものが26であり、中国語母語話者の発話が理解できずに日本人学習者が聞き返したものは48である。津田 (2015) は、異文化間英語会話及び日本語会話では、非母語話者による聞き返しは母語話者の4倍または2倍以上と報告している。本研究でも同じく、学習者の聞き返しが多く見られ、先行研究の指摘と共通していると言える。ただし、本研究の中国語母語話者の聞き返しは、学習者より少ないものの、日本語母語話者が聞き返しを避けた結果、相手の発話が理解できないまま会話が進行しうまくいかなくなるという津田 (2015) の指摘した現象は本研究では見られなかった。

4.2 使用される聞き返しの言語形式

中国語で見られた聞き返しの表現形式をHayashi & Hayano (2013) の分類を参考にして、分類した結果を以下に示す。

1. 感動詞類

日本語では感動詞「え↑」「ん↑」や「何↑」「何を言っている？」に類した表現である。発

6 “in the sense that they display the least grasp of the turn they are targeting and therefore provide the least help to their recipient in locating what the trouble source is and what type of trouble their speakers have encountered” (Hayashi & Hayano 2013, p. 296)。

7 They not only locate the trouble source for their recipient, but also display (or claim to display) a high degree of understanding of the trouble-source turn – to such a degree as to be able to offer a possible solution to the trouble. (Hayashi & Hayano 2013, p. 296)。

話の理解に問題があることは示されるが、発話のどの部分に問題があるか、どのような問題かという特定はなされていない。会話例⁸ 1の「嗯↑」のほか、「啊↑」「什么」などが見られる。

会話例 1

		【日本語訳】
1CN5	哎↑你 你日语考一级了吗？	え↑ 日本語1級試験を受けましたか
→2JN5	嗯↑	ん↑

2. 疑問詞疑問文

理解に問題のある発話にあった単語や表現を用いずに、「誰？」「どこ？」のような疑問詞を用いる疑問文での聞き返しである。発話のどの部分に問題があるかは示されていないが、どのような問題かを示す手がかりを与えている。同じターンの中で、感動詞類の後に、この疑問詞疑問文が続いている場合もあるが、その場合、感動詞類に分類せず、疑問詞疑問文にのみ分類する。会話例2では、「え↑」という感動詞で問題を示した後、「なんという名前ですか」とさらに話題の人物の特定に問題があることを示して聞き返しを行っている。

会話例 2

		【日本語訳】
1CN2	她很小吧 她今年 (2) 有二十岁吗？	彼女は若いでしょう 彼女は今年 (2) 20歳になりましたか
→2JN2	啊↑：：什么名字？	え↑ なんという名前ですか

3. 繰り返しと疑問表現

理解に問題のある発話に見られた単語や表現と疑問詞を使った疑問文である（会話例3参照）。問題の箇所やどのような問題であるかを示しているため、前述の2つの分類よりもさらに高い理解度を示す聞き返しとなる。

会話例 3

		【日本語訳】
1CN1	前一 前一段时间 有一部 非常有名的 甄嬛传 (2)	ちょっと前は、「甄嬛传」という非常に流行っていたドラマがある

8 文字化ルールは次のとおりである。発話者は、中日それぞれ C1～C6、J1～J6 の通し番号で示す。h は笑いなど吐息を示す。h の数は笑いなど吐息の長さを示す。[は重なりのはじまりを示す。↑ は上昇イントネーションを示す。→ は中国語の平のイントネーションを示す。? は中国語で疑問文であることを示す。: は音の引き伸ばしを示し、: の数は音の相対的長さを示す。{ 文字 } は非言語情報を示す。(数字) は、沈黙の秒数を示す。

→2JN1 甄嬛传是什么? 「甄嬛传」はなんですか

4. 繰り返し

相手発話の全部または一部を繰り返すもの(会話例4参照)。Hayashi & Hayano (2013)では、繰り返しは、理解に問題のある発話(またはその一部)を繰り返して理解の問題の所在を相手に提示しているため、話し手の理解度がさらに高いことが示されるとしている。

会話例4

		【日本語訳】
1CN5	我喜欢小栗旬:	私は小栗旬が好きです:
→2JN5	小栗旬 (1) 小栗 (2) 旬↑	小栗旬 (1) 小栗 (2) 旬↑

5. 確認の疑問文

聞き返しの対象となる発話を言い換えたり、省略された語彙や表現⁹を提示したりして、確認を求めるもので、中国語では、疑問詞を使わずに、文末詞「吗」を使うYes/No疑問文となる。Hayashi & Hayano (2013)では、対象となる発話の理解度が最も高いものとして位置づけられる。会話例5では、「你呢?」(あなたは?)は「你最喜欢的运动是什么(呢)」(あなたの最も好きなスポーツはなんですか)の省略表現と考えられ、CN4は省略された部分を取り上げて確認を求めた。

会話例5

		【日本語訳】
1JN4	啊hhhhhhh 你呢? 你呢你呢? 你呢?	あ: hhhhhh あなたはどうですか あなたはあなたは あなたはどうですか
→2CN4	我: 最喜欢的运动吗?	私: の最も好きなスポーツってことですか

日本人学習者と中国語母語話者の修復を開始する聞き返しの形式を比較した結果、中国語母語話者と日本人学習者が多用する形式に違いが見られた。日本人学習者には、繰り返しが最も多く見られ、次いで多かったのは感動詞類である。一方で、中国語母語話者の場合、感動詞類は繰り返しの3倍で、最も多く使われている(図1参照)。

また、「繰り返しと疑問表現」「疑問詞疑問文」について、学習者には見られたが、中国語母語話者には見られなかった。津田(2015)は、この二つの形式は、非母語話者には見られなかったと報告しているが、本研究では異なる結果が得られた。言語によって、聞き返し表現の使用形式が異なる可能性が窺われる。

9 Hayashi & Hayano (2013)では、proffer of insertable elements (PIE) としている。

本研究の日本人学習者に見られなかったのは、確認の疑問文である。確認の疑問文は、対象発話のある程度理解したうえでさらに異なる表現に言い換えるもので、発話への理解度が高いだけでなく、産出への負荷も高いため、学習者には難しいと考えられる。

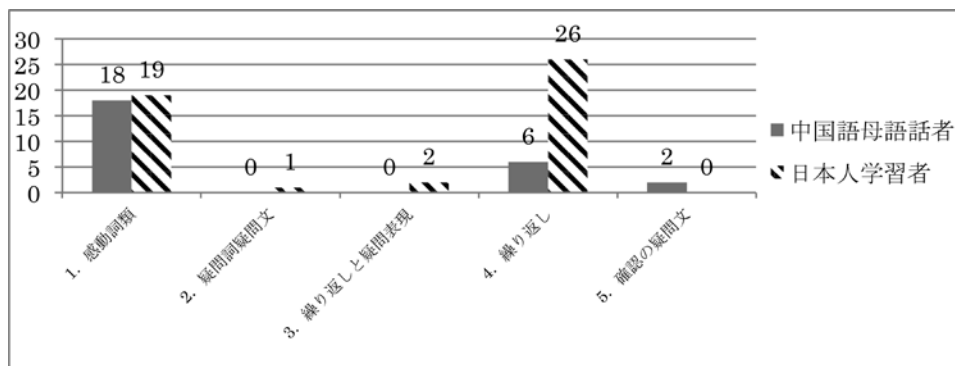


図1 中国語母語話者と日本人学習者の聞き返しの形式の比較

4.3 意味交渉のプロセス

4.3.1 意味交渉のプロセスのタイプ

発話の理解に問題があり、聞き返しが生じた後、会話の参加者双方が問題の修復に向かってさまざまな調整行動をする。理解の問題は、ほとんどの場合修復されるが、修復がなされないまま意味交渉が打ち切れ、話題転換が行われる場合も見られる。このような場合は、修復が失敗したと考えられる。本研究では、聞き返し発話のターンから問題が修復されるまたは修復の失敗が確定されるターンまでのプロセスを、a) 即座の修復、b) 遅延した修復、c) 修復の失敗という3つのタイプに分類した。以下ではそれぞれの会話例を挙げて説明していく。

a) 即座の修復

1往復のやり取りを経て問題が修復される場合である。Jefferson & Schenkein (1977) では、単純調整(宮崎 2002 訳)としているもので、意味交渉のプロセス(会話例6の四角い枠で囲った部分。以下同様)は短い。

会話例6は、学習者が相手の質問に、感動詞を用いて聞き返しを行う例である。ここでは、JN5はCN5の「聞いていて疲れますか」という質問に「嗯↑(ん↑)」と聞き返した。それを受け、CN5は質問をよりわかりやすい表現で言い換えた。ここでは、「费劲」(直訳では苦勞する、骨を折るとの意味)という慣用表現が、「觉得难吗(難しいと思いますか)」という初級レベルの表現に言い換えられた。聞き返し(2)とそれに対する応答(3)という1往復のやり取りを経て、(4)でJN5がICN5の質問に応答することで問題が修復されたことが示される。

会話例6 【即座の修復】

		【日本語訳】
1	CN5 那你听着啊 费劲吗?	じゃあ聞いていてね 疲れますか
→2	JN5 嗯↑	え↑
3	CN5 你听着 就是你听他们说汉语 觉得难吗?	聞いていて つまり彼らが中国語を話すのを聞いて難しいと思いますか
4	JN5 嗯 听 (3) 会说 (1) 不 hhhh[hhhhh]	うん 聞くのは (3) できる 話すのは (1) だめですhhhhh[hhhhh]
5	CN5	[啊:]

b) 遅延した修復

1 往復のやり取りでは修復されず、さらなる調整行動が見られたが、最終的には問題が解決される場合である。Jefferson & Schenkein (1977) では、複合調整(宮崎 2002 訳)としているもの¹⁰で、意味交渉のプロセスは2往復以上にわたり、長い。

会話例7では、JN6は、CN6の(2)の発話の一部「寿司」を上昇イントネーションで繰り返した(3)。それを受けたCN6は、「嗯」で確認を与えただけだった。それを受け、JN6は、「寿司是什么」と「繰り返しと疑問表現」で2回目の聞き返しを行った。ここで初めて、CN6は、JN6が中国語の「寿司」の意味が理解できていないことを認識し、笑いとともに、寿司を文字で書いて示した。(3) - (7)のやり取りを経て、(8)でJN6の「啊」という今はじめて気づいたことを示す感動詞(楊・中川 2014)が見られ、この時点で理解の問題がようやく解決された。

会話例7 【遅延した修復】

		【日本語訳】
1	JN6 你喜欢日本菜吗?	日本料理は好きですか
2	CN6 啊: : 我喜欢吃寿司	あ: : 寿司が好きです
→3	JN6 寿司↑	寿司↑
4	CN6 嗯	うん
→5	JN6 寿司是什么? [寿司	寿司はなんですか [寿司
6	CN6 [hhhhh [hhhhh	
	(2) {紙に書く}	
7	CN6 寿司	寿司
8	JN6 啊:	あ:
9	CN6 hhhhhh	hhhhhh
10	JN6 すし	すし

10 Jefferson & Schenkein (1977) では、問題が修復されない場合については、触れていない。

c) 修復の失敗

聞き返しの後のやり取りの長さに関わらず理解の問題が解決されない場合である。聞き返しを行った参加者から、理解の問題が解決されたことを示す発話が見られずに、意味交渉が終了する場合、修復の失敗と認定される。

会話例 8¹¹ は、中国語母語話者の理解の問題が修復されずに意味交渉が打ち切られた「修復の失敗」例である。ここでは、JN1 は行ったことのある商業施設の名前を挙げているが、途中から自己開始の修復をしている (1)。しかしそれが成功せず、CN1 は、理解できないことを「嗯↑ (ん↑)」で示し、聞き返しをした。それに対し、JN1 は「忘れた」と修復を完了できないことを示す。CN1 は「大丈夫」とJN1 に配慮を示し、引き続き修復を試みるJN1 に対して、「私もあまり詳しくありません」(6) と修復の手助けができないことを明示する。結局この商業施設の名前がはっきりしないままこの話題が打ち切りとなり、0.5 秒の間の後CN1 は異なる話題を導入した。

会話例 8 【修復の失敗】

	発話	日本語訳
1	JN1 然后 北海 嗯↑：北：大：北大↑Chuan ↑ (2) 北大chao [北大chao	それから 北海ん↑：北：大：北大↑Chuan ↑ (2) 北大chao [北大chao
→2	CN1 [嗯↑	[ん↑
3	JN1 啊↑忘了	あ↑忘れました
4	CN1 hh没关系[没关系	hh大丈夫[大丈夫
5	JN1 [很大的 很大的 [chao	[とても大きいとても大きい [cha
6	CN1 [啊我也 不太[清楚	[あ：私 もあまりくわし[くありません
7	JN1 [不知道 hhhh 啊：对：	[知らないんですね ¹² hhhh あ：そう
(0.5)		
8	CN1 这都是你的 你的同学吗？	この人たちはみなあなたの あなたのクラスメートですか

前述のとおり、本研究では、津田 (2015) で指摘していた母語話者が聞き返しを回避する場面は見られなかった。ただし、聞き返しを行い、意味交渉をはじめた後、理解が進まない場合、中国語母語話者または日本人学習者のどちらかが修復をあきらめる提案をするものが見られた。それは、本研究の分析対象となる会話が授業活動の一環としての会話練習であることも関係し

11 この会話では、1JN1 で自己開始の修復がすでにはじまっているが、それにもかかわらず、2でCN1 は聞き返しを行ったため、分析の対象とした。
12 ここでの「不知道」は、CN1 の発話を予測しながら、先取り発話していると考えられる。日本語訳では、相手の認知状況として「知らないんですね」と訳したほうが理解しやすい。

ていると考える。このような会話活動においては、参加者の双方とも、相手の発話を理解することよりも、意味交渉が長引くことにより会話が進んで行かないことを避け、円滑な会話を進めることを優先したと推察される。

4.3.2 意味交渉のプロセスのタイプの生起頻度の比較

中国語母語話者の聞き返しから始まった意味交渉のプロセスは、即座の修復は73%に上り、1往復で問題がスムーズに解決されるものが多いと言える。一方、日本人学習者の聞き返しから始まった意味交渉の場合、即座の修復は48%で、全体の半分以上にとどまる(表1参照)。中国語母語話者の聞き返しから始まった意味交渉の連鎖と比べて、学習者側の理解の問題の解決のプロセスはより長い。修復の失敗は、中国語母語話者と日本人学習者ともに1割未満で少ない。日本人学習者の聞き返しから始まった意味交渉のプロセスは比較的長いものの、意味交渉をすることにより問題はほとんど解決されるということが言えよう。

表1 意味交渉のプロセスの各タイプの生起頻度

	中国語母語話者の聞き返し	日本人学習者の聞き返し
即座の修復	19 (73%)	23 (48%)
遅延した修復	5 (19%)	21 (44%)
修復の失敗	2 (8%)	4 (8%)
計	26 (100%)	48 (100%)

4.3.3 意味交渉のプロセスに影響を与える要因

意味交渉は、会話における理解の問題を解決するために必要であるものの、意味交渉によって会話の流れが一旦止まってしまうため、意味交渉が長引くことは、会話のスムーズな進行を損なう可能性がある。本節では、意味交渉のプロセスは、①聞き返しの言語形式によって違いが見られるか、②聞き返しを受けた相手の後続発話によって違いが見られるか、という2つの観点から意味交渉のプロセスに影響を与える要因を検討する。4.2では、聞き返しに用いられる言語形式においては、中国語母語話者と日本人学習者ともに、感動詞類と繰り返しが多く見られ、それ以外の形式の使用は少ないことが分かった。そこで、本節では、感動詞類と繰り返しに絞り、意味交渉のプロセスの違いに影響を与える要因を検討する。具体的には、1.感動詞類と繰り返しから始まった意味交渉のプロセスのタイプの出現傾向に違いはあるか、2.感動詞類と繰り返しを用いて聞き返しを行った場合、その受け手の調整行動に異なる傾向が見られるか、という2点を分析し、考察を行う。

4.3.3.1 意味交渉のプロセスのタイプの生起傾向

中国語母語話者の場合、感動詞類から始まった聞き返しの意味交渉のプロセスのタイプを見ると、即座の修復は78%(表2参照)で、聞き返し全体における即座の修復の割合(73%,表1

参照) よりやや高い。一方、繰り返しの場合、即座の修復は50%にとどまる。つまり、繰り返しと比べて、感動詞類から始まった聞き返しは即座の修復につながる確率が高い。この傾向は、日本語母語話者の場合でも同様に見られ、聞き返し全体では48%である即座の修復(表1参照)は、感動詞類においては55%となる(表2参照)。

「え↑」「何↑」のような感動詞類は、理解に問題があることを示すだけで、発話のどこに問題があるかは示していないため、理解度の最も低い聞き返しとされている(Hayashi & Hayano2013)。接触場面の会話においても、どこに問題があるかを相手に伝えていないため、成功率の低い聞き返しとされている(林2007, 福富2012)。しかし、本研究の結果は、これまでの先行研究の結果とは異なっている。この点について、次節の受け手の調整行動の分析結果と合わせて後述する。

表2 感動詞類と繰り返しから始まった意味交渉のプロセスの比較(割合)

	中国語母語話者		日本人学習者	
	感動詞類	繰り返し	感動詞類	繰り返し
即座の修復	14 (78%)	3 (50%)	11 (55%)	11 (42%)
遅延した修復	3 (16%)	2 (33%)	7 (35%)	13 (50%)
修復の失敗	1 (6%)	1 (17%)	2 (10%)	2 (8%)

4.3.3.2 受け手の調整行動の比較

意味交渉は、聞き返しをした発話者と聞き返しの受け手との相互行為であり、聞き返しの表現が異なれば受け手の調整行動も異なり(尾崎1993, Miyazaki2000)、意味交渉のプロセスも異なることが予想される。本節では、聞き返しの受け手の調整行動を分析した結果を示し、これまでの分析結果とを総合して、効果的な聞き返し方略について検討する。

尾崎(1993)は、日本語母語話者の応答を「確認」「反復」「説明」と3つのタイプに分けている。そのうち、「説明」は、「学習者の母語に置き換える」や「具体例を示す」、「パラフレーズ」などの場合を含む(p.23)としている。本研究では、同じく「説明」でも、「学習者の母語に置き換える」と「具体例を示す」とでは、相手の理解度や意味交渉の結果が異なる可能性が高いと考え、「説明」一つにまとめず、より詳細に分類することにした。その結果、中国語母語話者の聞き返しに対する日本人学習者の調整行動には、「反復」「説明」¹³「知識の確認」¹⁴「コードスイッチング」¹⁵「発話の再構成」¹⁶「語彙の訂正」¹⁷が見られ、日本人学習者の聞き返しに対する中国語母語話者の調整行動には、「反復」「発話の再構成」「応答詞での確認」¹⁸「コードスイッチング」「説明」「文字の提示」¹⁹が見られた。

13 対象発話中のある部分を説明する。

14 話題に関する既存知識を確認する。

15 相手の母語や第3の言語(英語)に置き換える。

16 語彙の置き換えも含み、対象発話とはほぼ同義の文レベルで言い換える。

17 語彙のみを置き換える。

18 反復によって確認する場合もあるため、反復と区別して、「はい」や「うん」「そう」など応答詞での確認に限定している。

19 言語的な修復が見られないまま、長い間した後、問題が解決される場合、または発話から文字の提示がなされると推測される場合。

感動詞類と繰り返し別に、これらの調整行動の回数及び即座の修復につながる割合を分析した結果、中国語母語話者の感動詞類に対しては、問題となる発話や単語の反復が最も多くみられ、次いで多かったのは発話の再構成である。中国語母語話者は「嗯↑」や「啊↑」などの感動詞類で聞き返しを行うのは、主に日本人学習者の単語の発音が不明瞭だったり、不適切な省略によって文意が不明瞭だったりする場合である。発音の問題は学習者の繰り返しによって解決される場合がほとんどであり、文意が不明瞭の場合、言葉を補ったり言い換えたりするなど「発話の再構成」により問題は解決される。また、繰り返しに対しても、反復が最も多かったが、語彙の使用が不適切な場合、意味交渉のプロセスが長くなり、即座の修復につながらない場合がある。

表 3 感動詞類に対する日本人学習者の調整行動

	回数	即座の修復の割合
反復	8	75%
発話の再構成	6	67%
説明	3	100%
知識の確認	1	100%

表 4 繰り返しに対する日本人学習者の調整行動

	回数	即座の修復の割合
反復	3	33%
発話の再構成	1	100%
コードスイッチング	1	0%
語彙の訂正	1	100%

日本人学習者の感動詞類に対しては、中国語母語話者の調整行動は、発話の再構成と反復という2つしか見られない。そのうち、最も多く取られる発話の再構成は、90%が即座の修復につながり、効果的な調整行動であると言えよう。それと比較すると、反復の場合、即座の修復の割合は33%と低い。

一方で、繰り返しに対する中国語母語話者の調整行動は、確認、コードスイッチング、発話の再構成などバリエーションが多い。そのうち、コードスイッチングや文字の提示のようなすべて即座の修復につながるものもある一方、出現回数が最も多かった「応答詞での確認」は、即座の修復率が20%と最も低い(表5, 6参照)。

表 5 感動詞類に対する中国語母語話者の調整行動

	回数	即座の修復の割合
発話の再構成	10	90%
反復	6	33%

表 6 繰り返しに対する中国語母語話者の調整行動

	回数	即座の修復の割合
応答詞での確認	5	20%
コードスイッチング	4	100%
発話の再構成	4	50%
説明	3	33%
文字の提示	2	100%

ここで、前節で保留となった疑問、つまり「理解に問題があることのみを伝えたにも関わらず、即座の修復が見られる割合が高い」理由を考えてみたい。日本人学習者が感動詞類で聞き返しを行った場合、中国語母語話者には、学習者に理解の問題があり、しかも問題の所在が特定できないほど発話の理解度が低いことが示される。そこで中国語母語話者が取った調整行動は、「発話の再構成」と「反復」である。発話の再構成は、相手の学習者により理解しやすい語彙や言い回しに調整するもので、相手の発話の聞き取り及び理解の問題の両方に対応するもので、不特定の問題の解決に最も広範囲に対応できる方略と言えよう。それに比べて、「反復」は、未知の単語である場合は理解の問題の解決につながらない。感動詞類という理解度の弱い聞き返しを受けたからこそ、中国語母語話者は、発話の再構成をより多く用いたのではないだろうか。

会話例 9 は発話の再構成が見られた 1 例である。ここでは、CN3 は発話を調整し、倒置発話である 1 の発話の語順を変え、さらにいくつかの単語（中国、那些）を省いて調整を行った (3)。この調整行動により、1 往復のやり取りで学習者の理解の問題が修復された。

会話例 9

【日本語】

1	CN3	你最喜欢中国哪个地方？在你去过的 那些城市里	あなたは中国のどこが最も好きですか あな たが行ったことのあるそれらの都市の中で
→2	JN3	什么↑？	なに↑
3	CN3	在你去过的城市里 你最喜欢哪个地 方？	あなたが行ったことのある都市の中で どこが最も好きですか
4	JN3	最喜欢啊 啊：：(1) 嗯→：(2) 我 我喜欢上海	最も好きですか あ：：(1) ん：(2) 私 私上海が好きです
5	CN3	上海	上海

一方、繰り返しは、問題の箇所を特定して示しているのにもかかわらず、中国語母語話者も日本人学習者ともに、即座の修復につながる割合が低く、修復の連鎖が長い傾向がある。Hayashi & Hayano (2013) では、繰り返しの場合、問題となる発話を提示することにより確認をする場合が多く、5段階の理解度においては2番目に高いとされている。しかし、非母語話者の場合、

繰り返しは、聞き取った内容の確認か、聞き取った内容の意味の理解に困難があるか、明らかでないため、説明してもらえない場合がある (モンルタイ 2006)。それは、語彙を理解したうえでの繰り返しか、聞き取れた発音を再現するだけの繰り返しか、受け手には判断しにくいだけだと考えられる。受け手の調整行動を見ると、応答詞での確認が最も多く見られるのは、そのためであろう。実際に応答詞での確認の 8 割は、即座の修復につながらず、意味交渉のプロセスが長びく。前掲の遅延した修復として挙げた会話例 7 も、その 1 例である。JN6 は、3 で「寿司」と中国語で繰り返したが、相手から説明が得られなかったため、再び「寿司是什么」と明示的に「繰り返しと疑問表現」で聞き返した。ここでは、JN6 は、CN6 の発話と同じ音調で繰り返したため、理解の問題が伝わらなかったが、同じく繰り返しの場合でも、少し間をおいてからの繰り返しや、上昇イントネーションを大きくつけての繰り返しであれば、単語の意味理解に問題があることはより伝わりやすくなるだろう。

5. まとめと今後の課題

本研究では、日中接触場面の中国語会話における聞き返しに焦点を当て、日本人学習者と中国語母語話者の聞き返し表現の形式及び相手の調整行動を含む意味交渉のプロセスを分析した。その結果、中国語母語話者は、主に問題の特定が明確ではない感動詞類を用いているが、日本人学習者は、感動詞類より繰り返しを多用していることが明らかになった。感動詞類に対して、中国語母語話者は、語彙や表現を調整し、学習者が理解可能に「発話の再構成」を行って修復を行うため、ほとんどの場合即座の修復につながる。一方で、繰り返しに対しては、中国語母語話者には、様々な調整行動が見られた。そのうち最も多く見られた「応答詞での確認」は、即座の修復につながる確率が最も低く、意味交渉のプロセスが長くなる傾向がみられた。それは、繰り返しは、語彙や発話そのものの理解に困難があるということが中国語母語話者に伝わらない場合があるためであると考えられる。

本研究では、Hayashi&Hayano (2013) の修復の元となる発話の理解度の強弱からの分類に基づき、聞き返しの形式から分析した結果、理解度が高い繰り返しよりも、理解度の低い感動詞類の使用が即座の修復につながる確率が高く、より効果的な聞き返しであることが示された。Hayashi&Hayano (2013) の分類は、母語話者同士の会話を分析した結果であるが、非母語話者が参加する接触場面の会話では、理解の問題に異なる要因が働いていることが明らかになった。また、同じく Hayashi&Hayano (2013) の分類を用いた津田 (2015) でも、日本語会話や英語会話において、日本語母語話者が最も多用している言語形式は繰り返しであると指摘している。つまり、日本語母語話者は、使用言語を問わず、繰り返しを最も多用する傾向があるということが推察される。ただし、津田 (2015) では、繰り返しが即座の修復につながったかどうかについての分析がないため、本研究の結果と比較することはできない。中国語の会話に限れば、理解度の弱い感動詞類で聞き返しを行ったほうが、理解に問題があることが中国語母語話者に伝わりやすく、より積極的な調整行動を引き出すことができると言えよう。日本人学習者に対

する中国語の会話教育においては、単純に繰り返しをするだけでは、発話の理解に問題があるということが相手に伝わらない場合があること、効果的な聞き返しを行うためには感動詞類を活用することが有効であることを学習者に気づかせる必要もあろう。

本研究では、意味交渉のプロセスにおいて、初発の聞き返しが即座の修復につながるかどうかという点に絞り、効果的な聞き返し表現を検討した。今後は、意味交渉のプロセスが長いものについて、2度目、3度目の聞き返しの言語形式を含む会話参加者間のやり取りの詳細を質的に分析し、接触場面の意味交渉の解明を進めていきたい。

【付記】

本論文は、科学研究費補助金研究（平成24年度～26年度基盤研究C）、課題番号:18320080「中国語教育への社会的要請に応じるコミュニケーション能力育成のための日中対照研究」（研究代表者：楊虹）の一部である。

参考文献

- 尾崎明人（1992）「「聞き返し」のストラテジーと日本語教育」『日本語研究と日本語教育』,名古屋大学出版会, 251-263.
- 尾崎明人（1993）「接触場面の訂正ストラテジー — 「聞き返し」の発話交換をめぐって—」『日本語教育』 81,19-30
- 尾崎明人（2001）「接触場面における在日ブラジル人の「聞き返し」とその回避方略」『社会言語科学』 4 (1) , 81-90.
- 許挺傑（2013）「接触場面における日本語学習者の聞き返し連鎖についての一考察—聞き返し連鎖定義の再検討と学習者の使用実態—」『筑波応用言語学研究』 20, 16-29.
- 津田早苗（2015）「日・英語の他者修復—母語話者間会話と異文化間会話の比較—」『日・英語談話スタイルの対照研究—英語コミュニケーション教育への応用』ひつじ書房, 135-167.
- 林里香（2007）「接触場面における「聞き返し」調整計画についての一考察」『人文社会科学研究』 14, 98-111.
- 福富奈美（2012）「接触場面の日本語会話における「聞き返し」—どのような「聞き返し」が効果的なストラテジーと言えるか—」『四天王寺大学紀要』 53, 275-290.
- 方穎琳（2013）「接触場面での意味交渉におけるコミュニケーション方略—習熟度の異なる日本語学習者による連続調整に着目して—」『留学生教育』 18, 55-64.
- 宮崎里司（2002）「第二言語習得研究における意味交渉の課題」『早稲田日本語教育研究』 1, 71-89.
- モンルタイ・テンチャローン（2006）「電話における学習者の「聞き返し」ストラテジーの使用について—発話意図と表現形式に注目して—」『言語文化と日本語教育』 34, 11-19.
- 楊虹・中川正之（2014）「中国語と日本語の感嘆表現—感嘆詞“啊”“唉”“哦”を中心に—」『日中言語研究と日本語教育』 7, 50-60.

- 山本綾 (2014) 「英語話者と日本語話者の接触場面における誤解と不信および交渉」『学苑』 888, 13-23.
- Drew, P. (1997) Open class Repair Initiators in Response to Sequential Sources of Troubles in Conversation, *Journal of Pragmatics*, 28, 69-101.
- Enfield, N. et al. (2013) Huh? What? –a first survey in twenty-one languages, In M. Hayashi, G. Raymond, & J. Sidnell (Eds.), *Conversational Repair and Human Understanding*, 343-380, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hayashi, M. & Hayano, K. (2013) Proffering insertable elements: a study of other-initiated repair in Japanese, In M. Hayashi, G. Raymond, & J. Sidnell (Eds.), *Conversational Repair and Human Understanding*, 293-321, Cambridge: Cambridge University Press.
- Jefferson, G. & Schenkein, J. (1977) Some sequential negotiations in conversation: Unexpanded and expanded versions of projected action sequences, *Sociology*, 11, 87-103.
- Long, M. (1983) Linguistic and conversational adjustments to non-native speakers, *Studies in Second Language Acquisition*, 5(2), 177-193.
- Miyazaki, S. (2000) Communicative Adjustment and Adjustment Marker: The point of Request for Clarification 『第二言語としての日本語習得研究』 3, 57-93.
- Pica, T. (1994) Research on Negotiation: What Does It Reveal about Second Language Learning Conditions, Processes and Outcomes, *Language Learning* 44, 493-527.
- Schegloff, E. , Jefferson, G. & Sacks, H. (1977) The preference for self-correction in the organization of repair in conversation, *Language* 53(2), 361-382.